

「檀原健都の詔」(神武建国のみことのり)

それ ひじりの のりをたつ ことわりかならずときにしたがう

夫れ大人の制を立つ 義必ず時に随ふ

いやしくもおおみたからにくぼさあらば、なんぞひじりのわざにたがわん  
いやしくも民に利有らば、何ぞ聖造に妨わむ

またまさに やまをひらきはらい、 おおみやをおさめつくりて  
且まさに山林を披き払い、宮室を經營りて

つつしみてたかみくらいにのぞみ、もっておおみたからをしづむべし  
恭みて寶位に臨み、以て元元を鎮むべし

かみはすなわちあまつかみのくにをさずけたまうつつくしびにこたえ  
上は即ち乾霊の國を授けたまう徳に答え

しもはすなわちすめみまのただしきをやしないたまうところをひろめむ  
下は即ち皇孫の正を養ひたまえふ心を弘めむ

しかしてのちにくにのうちをかねてもつてみやこをひらき  
然して後に六合を兼ねて以て都を開き

あめのしたをおおいていえとせむことまたよからずや  
八紘を掩ひて宇と為むこと亦よからずや

かのうねびやまのたつみのすみかしはらのところをみれば けだしくにもななか  
夫の畝傍山の東南檀原の地を觀れば蓋し國のもななか。

みやこつくるべし  
治るべし

